

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02031

研究課題名(和文) 沖縄戦死別経験者のライフコースと家族キャリアに関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Life Course and Family Career of Okinawa War Bereavement Survivors

研究代表者

安藤 由美 (ANDO, Yoshimi)

琉球大学・人文社会学部・非常勤講師

研究者番号：60232104

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、沖縄を事例として、戦争に伴う父親との死別が子どものライフコースに対して及ぼした長期的影響を、統計的データおよびインタビューによるライフストーリーデータにより分析した。統計的観察からは、父親を早くなくしたことの、教育程度や結婚タイミングへの影響は認められなかった。ライフストーリー分析では、3人の男性の事例から、母親が中心となってやっていた農業を子どもの時から手伝ったが、3人とも家業の農業は継がず、運送業や公務員に従事し、これを生涯の仕事とした。ただ、これが父親を早くなくしたこととどのように関連するかどうかは、さらなる調査が必要といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、戦争と個人の人生過程に関するライフコース研究においては、戦争の人生に対する影響という場合、その研究対象は、軍務・軍役などで直接戦闘に参加した人びと(成人男性)が中心であり、彼らの家族、とりわけ子どもへの影響については、ほとんど科学的な問題関心の的になってこなかった。

本研究には、子ども期に(父)親を戦争で失った人びとの人生軌道に着目することで、これまで見過ごされてきた人生経験をとらえようとしたところに、これまでの研究にない新しさがある。また、戦争・戦災体験そのものではなく、それが後の人生に及ぼす影響を理解するという、戦争についての理解に新しい点を付け加えるものといえよう。

研究成果の概要(英文)：Using Okinawa as a case study, this study analyzes the long-term effects of war-related father bereavement on the life course of children by means of statistical and interview-based life history data. Quantitative observations showed no effect of losing a father early on the degree of education or timing of marriage.

In the life history analysis, the cases of the three men showed that although they helped their mothers with farming as children, which was their mother's main occupation, all three did not take over the family farm, but worked in transportation and public service, which they made their life's work. However, whether and how this is related to the early loss of the father requires further investigation.

研究分野：社会学

キーワード：ライフコース 戦争 沖縄 子ども コーホート 死別

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来、戦争と個人の人生過程に関するライフコース研究においては、戦争の人生に対する影響という場合、その研究対象は、軍務・軍役などで直接戦闘に参加した人びと(成人男性)が中心であり、彼らの家族、とりわけ子どもへの影響については、ほとんど科学的な問題関心の的になってこなかった。たとえば、親が戦争を体験したことの影響(具体的には戦争による配偶者との死別など)が、子どものライフコースにどのような影響を及ぼすかについて、まだ十分に解明されていないことが多いといえる。この問題の重要性を示唆する先行研究として、かつて研究代表者は、沖縄で戦争未亡人となった女性たちに、再生産キャリアの短縮化および少子、生殖家族キャリアサイクルの短期化(子どもの自立過程や、既婚子との同居)といった、戦争の長期的影響の一端を見出した。これらは、見方を変えれば、子ども自身のライフコースへの影響でもある。そこで、本研究は、視点を子どものライフコースに移して、そのライフコース上で、戦争によるライフコースの変容を検証することを着想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、沖縄を事例として、戦争に伴う親との死別が子どものライフコースに対して及ぼした長期的影響を、社会調査データを収集し分析することにある。ただし、ここでの親との死別経験とは、子ども期に父親と死に別れ、その後、片親家族(母子家族)で育った経験に限定している。子ども期の父親との死別に限定した理由としては、研究対象者のうちで、父親が生き残り、母親と死別したケースは極めて少なく、分析に必要なサンプルが十分確保できなかったため、研究対象から除外したというのが大きい。というのも、母親をなくした父親のほとんどは戦後、再婚したからである。

戦争の家族や人生への痕跡をつぶさに記述するという研究自体は何ら目新しいものではないが、そのなかで本研究の重要な特色は、本研究が採用するライフコース・アプローチにある。このアプローチでは、人生の展開過程を理解するのに、歴史的・社会的文脈(コンテキスト)と、出来事経験の時機(タイミング)とが決定的に重要である。このような視点をふまえて、本研究では、定位家族員との死別出来事、成人期への移行出来事、教育、職業達成、親なり(子どもが生まれたり、養継子をとったりして親になること)、子の自立出来事経験の記述を通して、ライフコースの構造ならびに主観的イメージを記述・分析した。とりわけ、ライフコース・アプローチが重視する、先行する経験の差異が後続のライフコースの差異とどのように関連しているかという視点に基づき、子ども期ないし少年期における(父)親との別れが、別れの時の本人の発達段階(年齢、役割保有状況)によって、後の家族キャリア展開にどのような違いをもたらしたのかを探ることを主たる分析課題とした。

3. 研究の方法

本研究の中心的な方法は、社会調査データを用いた、父親との死別を経験した人びとのライフコースの記述・分析である。それは、次の2つのステップから成る。第1のステップは、上でもふれた、研究代表者が過去に収集した、成人初期に第二次大戦および沖縄戦を体験した女性(これを第1世代=G1とよぶ)に関する統計調査データを用いて、その子ども世代(第2世代=G2

とよぶ)の出来事経験を再構成し、父親喪失による影響をとらえようとするものである。ただし、これは次に述べる、第2ステップの調査のための予備的な作業としての位置づけである。一方、第2のステップは、直接、G2にあたる人びとに対してライフコースの情報を収集するための社会調査を実施し、そのデータを用いてライフコース分析を行うものである。このような研究デザインにより、実の親子関係にあるG1女性とG2(男女)のペアデータを収集し、分析するというのが、本研究の特色となっている。以下、これら2つのステップについて、もう少し詳しく述べよう。

第1ステップのG1のデータ(85人)は、出生年が1914~18年生まれの人びと(出生コーホート)で、研究代表者が1994~97年に沖縄県本島中南部に位置する3つの町村からの無作為抽出標本に対して実施した調査により収集した。このG1は、第二次世界大戦期に30歳代であり、すでにほぼ全員が結婚して子どもをもっていたが、彼女らのおよそ4分の1が、戦争が原因で夫と死別していたことがわかっている。

一方、G2への調査は、本研究において新たに企画したものである。実査では、上述のG1のお宅を訪問し、G2に該当する人が健在であった場合、調査協力を依頼した。特に、G1が戦争未亡人であるサンプルには優先的に訪問し、受諾が得られた場合は、インタビューを実施した。それ以外のG2には、自記式の統計的調査を行った。

ただ、実のところ、このG2への調査は、2023年度内に完了しなかった。その最大の理由は、2020年度から2022年度まで、新型コロナウイルス感染症の流行により、実査がまったく実施できなかったためである。加えて、最終年度の2023年に、統計的調査を併用するという調査モードの変更もあったことにも起因している。幸い、研究代表者は、2023年度から同じ対象者集団で別テーマの研究課題(基盤(C)、課題番号23K01750)を実施中であり、この調査の中で引き続き本研究の課題に関する調査項目についてもデータ収集を行っていく予定である。

4. 研究成果

(1) G1データから再構成したG2の教育程度・結婚及び同居タイミング

まず、第1ステップの、G1データから再構成したG2のライフコースの分析では、親(G1)が子ども(G2)の卒業を最初に経験した年齢および最後に経験した年齢から、当該のG2子特定し、その卒業年齢を算出した。結婚および結婚後の親との同居開始についても同様に算出した(これらはいずれも、子どもの出来事を親が経験した年齢である)。これらの出来事について、15歳までに父親(G1の夫)をなくしたかどうかによる経験の違いを検討した。知見としては、卒業年齢、最終学歴、結婚年齢、同居開始年齢(同居した場合)のいずれについても、父親の有無による違いは、さほど認められなかった。

これは、ある意味、意外であったが、同時に示唆的である。というのも、冒頭でふれたように、戦争未亡人となったG1女性は、夫をなくさなかった女性に比べて、子どもを少なく、早く産み終わることになった結果として、子どもの卒業や結婚の終了すなわち子育ての終了が早く訪れた(出来事によって、10~14年早かった)。しかしながら、子ども側の出来事経験をみると、このような戦争未亡人の子どもが、父親が少なくとも15歳まで健在だった場合と比べて、卒業や結婚が特段早かったり、あるいは逆に遅かったりということはなかった。

このような結果について、現時点でいえることは、G2の教育程度、結婚タイミングは、父親の不在といった家族内の要因よりも、家族外の要因(教育環境や労働市場、結婚市場など)に強

く規定されていたことを示唆している。G 2 が卒業から結婚を迎えたのは、1950 年代から 60 年代であるが、この時代、おしなべて教育程度は初頭から中等へ上がり、結婚は同郷者同士で行われ、また長男同居が一般的だった。こうしたことについて、もっと深く知るためには、G 2 本人からの情報を広汎に収集することが不可欠である。

(2) 父親を戦争で亡くした G 2 へのインタビューから

次に、母親 (G 1) が戦争未亡人となった G 2 に特化したインタビューであるが、先述のように、まだデータ収集が完了しておらず、結果の分析までは至っていない。ここでは、研究期間内に得られた 3 ケースのライフヒストリーの概略を提示することで研究成果に代えたい。以下では、3 名の対象者を、ここでは仮にケース A、ケース B、ケース C と呼んでおく。

ライフヒストリーの概略

ケース A :

1937 年生まれ。沖縄戦が始まってから、父親は、所有していた馬車ごと徴用されていたが、1945 年 4 月、米軍の艦砲射撃により爆死した。あとに、母親と A さんと、きょうだい 2 人が残された。学校時代から農業の手伝いをした。中学卒業後、母親と一緒に農業をやっていたが、20 歳頃に運転免許を取得し、村から出荷する野菜を農連市場に運搬する仕事を始めた。農作物の集荷や配達業務のほか、農連市場で大工仕事や修繕を請け負ったりもした。75 歳で引退するまで農連市場の内外でこうした仕事をした。25 歳で同じ集落の女性と結婚。4 人の子どもをもうけた。母親とは、結婚当初から同居した。母親は、2016 年に 99 歳で亡くなった。

ケース B :

1936 年生まれ。山間の開拓集落出身で、父親は馬車引きや製糖など、農業以外の仕事で生計を立てていた。沖縄戦が始まると、父親は防衛隊 (在郷軍人からなる民間義勇兵) に召集された。父親はそのまま行方不明となった。B さんは、母親やきょうだい、親戚と本島南部へ避難中に米軍の捕虜となり、収容所に送られた。収容所で弟 2 人が病死し、母一人子一人となった。戦後、自宅に戻ってからは、母親と 2 人で農業をやった。

母親が 1 人で農業をし、自分を養ってくれていたため、自分も中学卒業後、同級生の多くがそうしたように、米軍基地で軍雇用員になって、母親を助けるつもりでいた。しかし、母親が高校への進学を強く勧めたため、高校を受験し進学した。母親は、農業のほかに、軍雇用員をして、生活を支えた。高校時代の教師の勧めもあり、短大に進学した。在学中は、いろいろアルバイトをして学費を稼いだ。卒業後、中学教師となった。28 歳で隣の集落の女性と結婚。4 人の子どもをもうけた。母親とは、結婚当初から同居した。母親は、2002 年に 86 歳で亡くなった。

ケース C :

1938 年生まれ。本人が 5 歳の時、父親は外地で戦死した。きょうだいはなく、一人っ子。戦後、母と 2 人だけで暮らした。中学卒業後、23 歳になるまで、2 人で農業をやった。その後、運転免許を取得して、工務店に就職した。いくつかの店を異動した後、大型トラックを購入して、自営の運送業を始めた。35 歳で、母親の知人の娘と結婚。4 人の子どもをもうけた。母親とは、結婚当初から同居した。母親は、2011 年に 95 歳で亡くなった。

暫定的な知見 G 2 の教育、職業キャリア、家族キャリアをめぐって

1994～1995 年の G 1 調査の結果から、戦争による夫ないし父との死別により母子家族となったグループでは、母親 (G 1) と既婚子 (G 2) との同居開始タイミングが、父親が健在だったグループに比べて、かなり早かったことがわかっている (中央値は、前者が 54.0 歳、後者が 67.5 歳)。今回インタビューした 3 人の場合も、結婚が遅かった C さんをのぞけば、母親は 40 歳代で長男夫婦と同居を開始した。今回インタビューした 3 人の G 2 は、いずれも、長男あととりであった。

3 人の職業キャリアの形成に作用したと思われる要因として、当時の社会経済的な状況があったと思われる。A さんの出身地は、戦後、米軍基地からの農作物の需要供給地となった。農業だけでなく、その生産物の流通・販売業も拡大した。一方、C さんが、自分でダンプカーを購入して、建設用の砂利運搬業を始めたのは、沖縄が本土に復帰した頃であった。復帰以降、本土の建設資本が入ってきて、公共工事が展開したという経済状況のなかで、C さんの職業キャリアはかたちづくられたといえよう。

B さんが短大に進学したのは、沖縄の高等教育の先駆けの時代だった。こうした教育熱の高まりの背景のなかで、進学を強く勧めた高校の教師との出会いも、彼の人生を形作る重要な要因になったと考えられる。

(3) 今後の課題

ただ、現時点ではまだ、上でみた 3 人のライフコースに、父親を早く亡くしたことの影響をはっきりと読み取ることはできていない。1 つの手がかりとしては、3 人に共通していたのは、母 1 人子 1 人で、母親が中心になって農業に励み、G 2 も母親と一緒に働いていたこと、そして、これも 3 人に共通する母親の印象として、母親はとても働き者で、責任感の強い人だったという。このような母親の存在が親子関係や子どものライフコース形成に何をもたらしたかを知るには、父親が健在だったケースとの比較が必要となる。

父親が戦争を生き延びた G 2 から調査でしばしば聞かれたのは、戦後、一家の農業のリーダー役となった父親の印象は、やはり厳しい人だったというものである。強いリーダーシップは、農業を家業とする家族の特徴ともいえるが、夫 (父) がいない家族の場合、子育て・しつけの責任も担った母親が、仕事の上でもリーダーとなり、一家を統率したようである。このような母親の強いリーダーシップは、米国で大恐慌によって困窮化し、失業した父親の代わりに母親がリーダーシップを発揮して、厳しい状況を乗り切った事例を思い出させる。

子ども期・少年期に父親と死別した人びとのライフコースについての情報収集は、今後も継続していく必要がある。ライフコースに関する先行研究から類推するなら、父親との死別の影響は、必ずしも一律ではなく、出生コーホート、地域性や社会階層、あるいは、家族の状況などによって違いがあったかもしれない。このような多様性について解明するべく、今後も調査研究を継続していくことが、戦争による死別の人生経験への影響を理解する上で不可欠といえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------